JRRN 会員寄稿（3）　*JRRN Member Contribution*

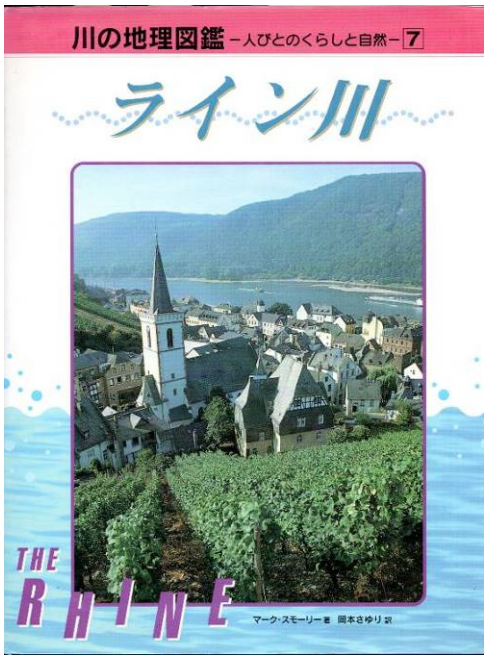
河川書の探求*(16)*

西ヨーロッパの発展をなすライン川

古賀邦雄・古賀河川図書館（JRRN 会員）

1. ライン川の流れ

ライン川は、スイス、オーストリア、フランス、ルクセンブルク、リヒテンシェタイン、ベルギー、イタリア、ドイツ、オランダのヨーロッパ 9 カ国を流れる国際河川である。水源は、スイスのアルプスの奥地から流れだす、雪解け水である。

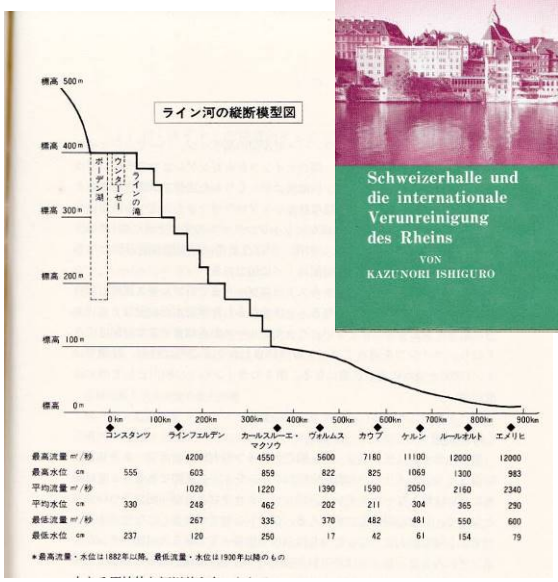


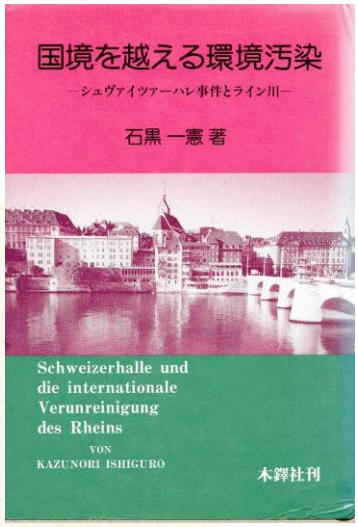
マーク・スモーリー著『**ライン川**』**(偕成社・1995 年)**は、ライン川の水を調節する美しいボーデン湖から、アルプスライン・高地ライン下り、フランスのバーゼル、ストラスブール、ドイツのマンハイム、マインツ、ビンゲン、ボン、ケルン、デュッセルトルフ、オランダのロッテルダムに至り北海までを辿る。運河建設による水上交通、ロッテルダムのユーロポートの発展、炭田の開発後・ルール地方の工業地帯には、製紙工場、石油化学工場、石油精製所、火力発電所、原子力発電所が並んでいる。

1986 年 11 月 1 日バーゼルのスイスの三大化学薬品メーカーの一つサンド社の倉庫から火災が起こった。消防隊が放水した 1,000 トンの水とともに、水銀などの有害物質を含んだ農薬、化学薬品など 30 トンがライン川に流れ、川は赤く染まり、水中の生物は 560 キロ先まで死んだ。最も清らかな上流 200 キロか死んだ状態になってしまった。

さらに、ロマンティック・ラインでは、ライン峡谷にあるローレライ像、数々の古城を案内する。ボーデン湖畔、ラインヘッセル地方のライン産ワインを紹介する。ジュニア地理・川と生活を著した C.A.R.ヒルズ著『**ライン川**』**(帝国書院・1987 年)**がある。

なお、1986 年 11 月 1 日に起こったサンド社の火災事故について、石黒一憲著『**国境を越える環境汚染－シュヴァイツァ－ハレ事件とライン川－**』**(木鐸社・1991 年)**には、火災事故とその背景、国際環境汚染の実態、西ドイツ・スイスの国際私法の改正、ライン川国際汚染防止への条件枠組と一般国際法などが詳細に論ずる。





2. ライン川の紀行

ライン川をスイスの渓谷からオランダまで 1,320km の流れの旅は、多くの人たちが魅了される。 加藤武男著『**ライン河の源流紀行－9か国　自転車ひとり旅－**』**(文芸社・2007 年)**は、2006 年 6 月 2 日アムステルダムからライン川源流を目指しての旅が始まった。ケルン～ボン～ワインの町・リュ―デスハイム～ハイデルベルクへ、途中で自転車を盗まれるが、6 月 22 日新自転車でラインの滝に到着する。船の航行はここまでである。滝は高さ 25 メートル、幅 150 メートルもあり、5 階建てのビルからライン川の水が落ちてくるような、すごい量の水が流れてくる。「自分の目の高さでライン川を見ながら自転車でここまで来てみてみると、さらにライン川に対して、温かい親しみがこみ上げてきた」という。

秋本和彦・小塩　節他執筆『**ライン紀行　1300　キロ**』**(新潮社・1987 年)**には、山口青邨のバーゼルにて、斉藤茂吉のマインツの一夜、兼常清佐のベートーヴェンの家、コロン寺縁起などが収められており、日本文学者がライン川を巡り、親しんでいることが解る。

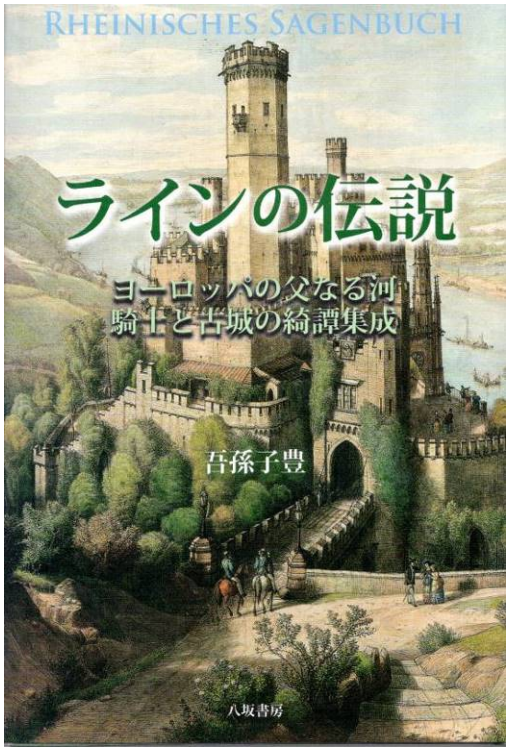
鈴木　享著『**ライン河の古城**』**(鷹　書房・1982 年)**には、カラー写真で、岩上のラインシュタイン城、中世の町ゾーネック城、十字軍伝説のノーリッヒ城、ラインに浮かぶ軍艦ファルツ城、カウプの町とグーテンフェルズ城、中世城郭の原型とどめるマルクスブルグ城などをラインの船上から捉える。古城の構造の特徴を次のようにあげている。

①城主の住居のある本館は、台所、居間、婦人の間、宴会場、舞踏会場、寝室であり、日本の城主は天守閣のある本丸には住まず、二の丸御殿に住む。②天守閣は城内で最も見晴らしいのいい塔である。城が攻撃を受けた時は、ここが司令塔になる。塔の底部は地下室になっており、牢獄を設けている。③頑丈な礼拝堂がある。④行政施設があり、役所、通行料徴取所、家臣の住居、兵器庫、穀倉、鍛冶場、ワイン醸造場などがある。⑤城門である。⑥城門と内郭を結ぶ跳ね橋である。非常の場合は、橋を引き上げて侵入を防ぐ。日本の城との相違は興味を引く。ワインに関しては、新井皓士著『**ドイツ・ラインとワインの旅路**』**(東京書籍・1994　年)**がある。吾郷慶一著『**ライン河紀行**』**(岩波新書・1994 年)**。

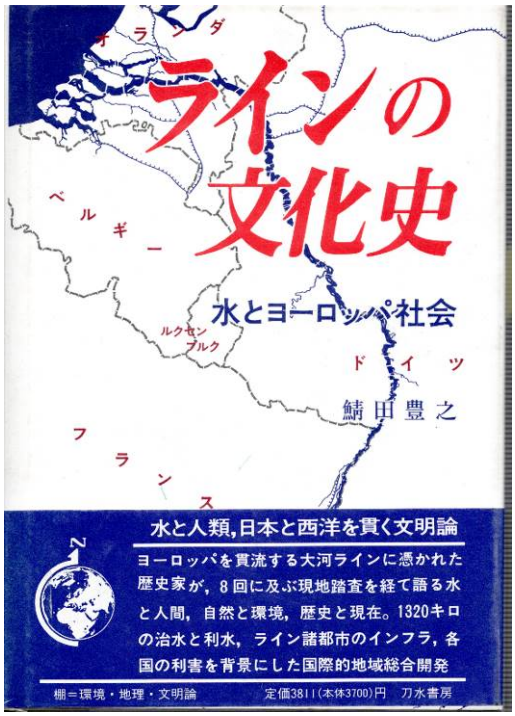
3. ライン川の伝説

ライン川はアルプスの水源から北海まで、9 カ国の地域に流れるなかで、様々な伝説が生まれる。ローレライというのは、妖精の岩のことである。昔、七人の乙女が余りの心の冷たさに岩になってしまった。水量が少なくなると七つの岩が姿を現すと言う。以後、彼女らはこの断崖に棲みつき、その美しい姿と歌声でラインの船乗りを惑わすことになった。そのため岩に激突して溺れ死ぬ船乗りが続出したという。この伝説は、ハイネの詩「ローレライ」で知られる。

吾孫子　豊著『**ラインの伝説**』**(八坂書房・2017　年)**は、ヨーロッパの父なる河　騎士と古城の奇譚集成である。浅井治海著『**昔話でつづるライン川の旅**』**(日本図書刊行会・1999 年)**では、マインツからケルンまでの間の昔話を収録する。マインツの車輪の紋章の始まり、マインツのどんぐり石のいわれ、聖母マリアから靴を貰ったマインツのバイオリン弾き、フン族にケルンの町は占領できないと予言した聖ウルズラ、家の精たちがケルンから逃げ出すなどが収録されている。



4. ライン川の文化史



ライン川は古代から流れる。1868 年以来、通行自由を保障された国際河川であり、接続する運河・支流を合わせると、数えきれないような船が上下する。そこには必ず歴史や文化もまた、流れている。

小塩　節著『**ライン河の文化史**』**(東洋経済新報社・1982 年)**では、ライン河の歴史は、軍隊や国家の争いよりも、むしろ流域の平野、山岳、農村、都市、とりわけの森林の歴史であり、人間の営為の歴史にあるという。ライン河は大部分が平野の川であって、主として舟運に用いられ、水田稲作にはまったく利用されていない。ライン河の港として発展した諸都市が広いヒンターランドを持ち、それを富ませながら相互協力のうちに自らも発展してきたと指摘する。この視点から、ライン河を沿いの港湾都市を探求する。

鯖田豊之著『**ラインの文化史－水とヨーロッパ社会－**』**(刀水書房・1995 年)**は、ライン河について、総合的に捉え、ヨーロッパとの社会にどのように与えているが論じて、素晴らしい。その内容は、第 1 章 ヨーロッパとライン河では、新しい物流の時代－コンテナとローロー船、政治がらみライン水運中央委員会、航行に不可欠な水位表。第 2 章　野生ラインの制御では、前・後ラインの発電用ダムの効用、高ラインの水力利用、原子力発電と砂利投下、ネッカー高水とマイン高水。第 3 章　あいつぐ岩盤の爆破、モーゼルの運河化とモーゼル高水、低ラインの河床沈下はいつまで、神経質なルールナルト量水量の微調整。第 4 章　環境保全と自然浄化では、サケ・マス魚の衰退、ラインの 10 大汚染源の公表、冷却水と温排水、サンド社事故後も自然浄化力は健在、ラインの回復はヨーロッパの先例になるか?　などを、論じる。

笹本駿二著『**ライン河物語**』**()岩波新書・1974 年)**、加藤雅彦著『**ライン河－ヨーロッパ史の動脈－**』**(岩波新書・1999 年)**を掲げる。

5. おわりに

以上、いくつかの書でライン川について、みてきたが、日本の河川との相違も感じられる。

日本と違って、急流な河川でないライン河はアルプスから流れ出す清浄な豊富な水量を誇り、ヨーロッパの 9 ヶ国に沿って流れる国際河川である。最も効用を発揮しているのは、運河と支流で結ばれた舟運の発達であろう。舟運を土台として、各国相互の産業発展である。そして、観光を含めた歴史や文化の発展を備えている。ライン川は偉大な河川である。

連載『河川書の探求』のバックナンバーは JRRN ホームページ内の以下のページよりご覧いただけます！

http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/library